

アカネズミとヒメネズミ

佐々木彰央・山本幸介

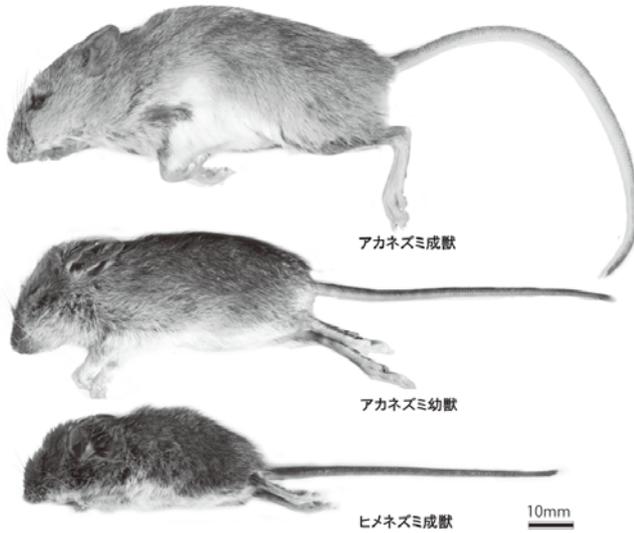


図1 アカネズミとヒメネズミの外見

アカネズミとヒメネズミは齧歯目ネズミ科アカネズミ属の“いわゆるネズミの仲間”です。アカネズミ属は世界に20種、日本にはハントウアカネズミとセスジネズミを含む4種が分布しています。アカネズミとヒメネズミは日本固有種ですが、日本の各地に分布しており、北海道、本州、四国、九州、淡路島、小豆島、隠岐諸島、対馬、五島列島、天草諸島、屋久島、種子島などで確認されています。

静岡県のアカネズミとヒメネズミは南アルプスや富士山などの高山帯から海岸付近まで、広葉樹林帯から人工林を含む針葉樹林帯まで多様な環境で暮らしています。アカネズミの生活様式は地上での活動が主で、巣を地中に作ります。ヒメネズミは地中と地上のみならず、樹上も利用するため、木の小さな洞や隙間に巣を作ることが知られています。巣は落ち葉などを詰め込んだものが一般的です。また、民家などにも侵入することがあります。

このように野山や里地であれば、ほとんどの場所で見つかるアカネズミとヒメネズミですが、図1の通り外見が非常に似ています。通常、成獣のアカネズミは成獣のヒメネズミよりも大型ですが、幼獣のアカネズミと成獣のヒメネズミは混同されることが多く、有名な話としては、アカネズミとヒメネズミの記載者である

テミンク氏がヒメネズミの記載時に用いた3個体の標本の内、アカネズミの幼獣1個体を混ぜてしまっていたということがあります。このような間違いを防ぐためには、尾長と足長を計測し比を求める方法が有効です。しかし、本属の尾は長くて切れやすいため、欠損の疑いがある個体については、頭骨標本を作製し、頬骨弓と咬板前縁の形状を観察する必要があります。頬骨弓とは図2-aの矢印で示した部位のことで、咬板前縁は図2-bの矢印です。頬骨弓下縁と咬板前縁の合流する図2-cの位置を基部として、頬骨弓が基部よりも前方に突出した後に落ちていけばアカネズミ、基部の直下で落ちていけばヒメネズミです。この方法によって、アカネズミとヒメネズミを正確に識別することができます。

私たちは現在、上記の同定基準と並行して使える、新たな同定部位についての検証を行っています。それが東海自然誌8号で報告した「静岡県内で捕獲されたアカネズミとヒメネズミの頭蓋骨における識別方法について」です。この識別方法は、頭蓋骨の高さと頭骨最大長を計測することで、2種を数値から判断するというものです。現在、データ数を増やすと共に、全国各地のアカネズミとヒメネズミの頭骨の高さを計測し、全てのアカネズミとヒメネズミに対して有効な方法かどうかを検証しています。最終的には肉皮がついた状態でも本属2種を識別できるかどうか、調べていきたいと考えています。

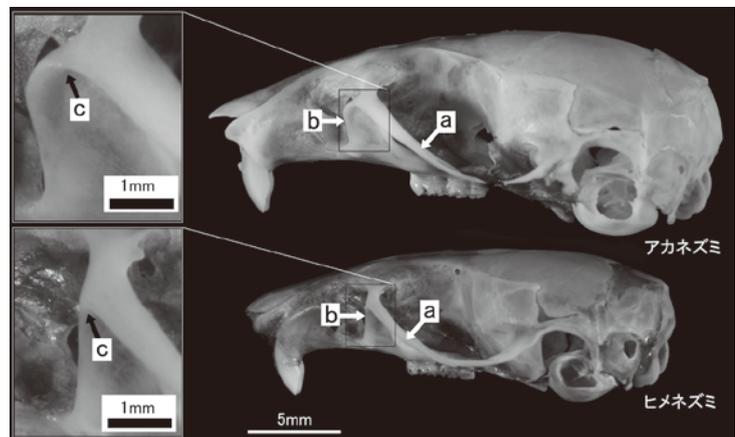


図2 アカネズミとヒメネズミの頭骨 a: 頬骨弓、b: 咬板前縁、c: 基部（頬骨弓下縁と咬板前縁の合流点）